

第 2 回天理市総合教育会議 議事録

開催日時	平成 31 年 2 月 19 日 (火) 14 時 30 分～16 時 15 分
開催場所	天理市役所 5 階 531 会議室
出席者	並河市長、森継教育長、田中教育委員会委員、西畑同委員、 名倉同委員、西田同委員
欠席者	なし
事務局	藤田副市長、岡本公室長、上田総合政策課長、 三喜田同課係長、今西同課主査、桑原同課主査、榊谷同課主事
事務局側	仲谷教育委員会事務局長、木村同局次長 高山まなび推進課長、綿谷まなび推進課指導主事、 土田教育総務課係長、三浦同課主任主事 田中児童福祉課嘱託職員、伊勢櫟本小学校長

◇会議次第

○開会

○市長挨拶

○案件

1. 次期教育大綱について
2. 総合教育会議に関する事務の補助執行にかかる地方自治法第 180 条の 2 に基づく「協議」について
3. 前回会議のフォローアップ
4. 地域と学校について
5. 平成 30 年度の教育大綱に基づく主な取組状況について

◇資料

○次第

- ・次期教育大綱について (P 1)
- ・総合教育会議に関する事務の補助執行にかかる地方自治法第 180 条の 2 に基づく「協議」について (P 2～3)
- ・前回会議のフォローアップ (P 4～5)
- ・地域と学校について (P 6～10)
- ・平成 30 年度の教育大綱に基づく主な取組状況について (P11～26)

<事務局 上田総合政策課長>

本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。まず、市長よりご挨拶をいただきます。

<並河市長>

大変お忙しい中、第2回総合教育会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。早いもので、前の教育大綱をお作りいただいてから丸3年が経過いたしました。来年度が最終年度ということで、次の教育大綱も考えていけない時期になりました。また私事としては、学力に加えて、それぞれのさまざまな特性を持った子どもたちが多様性の中でどれだけ自分の良さを育ていけるのか、という部分であったり、また、地域との関わりを重視していきたいと思っています。また全国的にもイジメや不登校などネガティブな点についても社会全体が過敏になっている状況がございます。その中でも取組の成果や課題について率直にご意見いただく中で、良い形で来年度に向けて進んでいきたいと思っております。どうぞよろしく願い申し上げます。

<事務局 上田総合政策課長>

ありがとうございます。本日の資料ですが、事前にお配りしております次第をはじめとする26ページのもので、本日は、この資料の次第に沿って会議を進めていきたいと思っております。本日の案件は資料にございます通り5件ございます。終了時間は、16時を予定しておりますので、最後までよろしく願いいたします。それでは案件に入ってまいりたいと思っております。ここからの進行は並河市長にお渡ししたいと思っております。

<並河市長>

それでは、議事を進めていきたいと存じます。最初に「1. 次期教育大綱について」を事務局から説明をお願いいたします。

1. 次期教育大綱について

<事務局 三喜田総合政策課係長>

先ほど、市長からもお話をいただいたところですが、現行の教育大綱の期間が平成31年度末までとなっており、次期教育大綱を平成32年4月にスタートさせるためには、来年度に次期教育大綱の策定作業が必要となります。策定のスケジュールは、資料のP1にお示ししております。次期教育大綱の策定につきましては、現行教育大綱の策定時のように1から中身を考えるとというわけではなく、現行教育大綱の振り返りを行うなかで修正を行う部分があれば修正をする、といった、いわゆる一部修正の方式で策定できたらいいと考えております。

そしてこの総合教育会議ですが、今年度は 8 月と 2 月の 2 回開催させていただいておりましたが、来年度は次期教育大綱の策定もありますので、3 回開催させていただきたいと考えております。具体的には、7 月の第 1 回目では、次期教育大綱の策定方針を決定させていただき、10 月の第 2 回目では、パブリックコメントを直前に控えた案を固め、最終回である 2 月の第 3 回目で次期教育大綱を確定したいと考えております。

なお、来年度 1 年間は現行教育大綱が続いていますので、この現行の教育大綱につきましても、これまでどおり年度当初に 3 つのテーマを決定させていただいて、それぞれ 3 回の総合教育会議で 1 テーマずつご議論いただきたいと思いますと考えております。

以上です。

<並河市長>

ありがとうございます。今「一部修正」という話がありましたが、今ある流れを大切にしながら深めるべきところは深めていく、課題についてはしっかり考えていきたいと思っておりますが、皆さんから、今後の進め方について何かご質問等ございますでしょうか。

具体的な進め方中身については、3 回の会議の中でしっかりやっていくということできたいと思います。

それでは、「2. 総合教育会議に関する事務の補助執行にかかる地方自治法第 180 条の 2 に基づく「協議」について」部分に入っていきます。事務局から説明をお願いいたします。

2. 総合教育会議に関する事務の補助執行にかかる地方自治法第 180 条の 2 に基づく「協議」について

<事務局 三喜田総合政策課係長>

くり返しになりますが、来年度は、次期教育大綱の策定に向けた作業とともに現行の大綱の議論も合わせて進めていかなければならないため、必然的に事務局の作業量も増加することが予想されている。現在、教育大綱の策定および総合教育会議の事務局の所管は、市長公室総合政策課ですが、教育大綱や総合教育会議で扱うテーマや内容の大半が、教育委員会が所管されている事項であり、次期教育大綱の策定時にも教育委員会で作業の中心を担ってもらうことが想定されます。

このことから、大綱の策定、総合教育会議の事務局を教育委員会事務局の教育総務課に事務を移管し、事務の合理化・効率化をはかっていきたいと考えています。

全国的な傾向としても、全国の半数以上の自治体が、教育委員会が当該事務を所管しています。

本市では、教育大綱の策定に関する権限は依然として市長に残したまま、事務の所管を教育委員会事務局に移管するという、「地方自治法の第 180 条の 2」に定める補助執行という手法により事務の移管を行いたいと思います。

資料の P2 に補助執行の説明がございますが、その上段に地方自治法の条文が掲載されています。赤字部分を読み上げますと、「普通地方公共団体の長は、その権限に属する事務の一部を、当該普通地方公共団体の委員会と協議して普通地方公共団体の執行機関の事務を補助する職員をして補助執行させることができる」と記載されています。市長と教育委員会との協議が整うことを条件に補助執行をさせることができる、というように定められております。

補助執行という手法は、昨年度に公民館に関する事務を教育委員会の生涯学習課から市長部局の市民協働推進課に移管した際の手法と同様で、今回は市長部局から教育委員会への補助執行という逆パターンになっております。

P3 をご覧ください。こちらには市長と教育委員会との協議が整ったことを証する「協議書（案）」を掲載しております。委員の皆さま方におかれましては、この「協議書（案）」をご確認いただくなかで、今回の件について必要なご議論をしていただき、最終的には当該協議書の案についても承認いただきたいと考えております。以上です。

<並河市長>

ありがとうございます。公民館のときと逆パターンではありますが、市長部局がこれまで所管してきた流れとしましては、次世代の子どもたちを健やかに育むということを教育委員会だけではなくて首長も含め、主体的に関わるべし、ということで、特に安全確保などの重要な部分についてはしっかりやらないといけないので、力を合わせて取組んでいきたいと思っております。

やはり、教育の中身という部分で考えると教育委員会事務局を中心となって役割を果たしてもらいながら、責任権限の点では、わたくしも見させていただくこととなります。

会議自体の形態は変わらないと考えております。ただ今、総合政策課が中心となって説明してくれたものが、教育委員会事務局に移ることとなります。何か皆さまからご質問等あればお願いいたします。

<西畑委員>

公民館の事務が市長部局に移管された際に、生涯学習課の人員減がありましたが、今回市長部局から教育委員会に移管されるときに負担は増えないのでしょうか。今の人員で本当にやっていけるのか不安です。

<並河市長>

その点は、厳しい人数で頑張っているのでも、できるだけ学校現場に近い方と触れ合って中身を充実させるところに時間を割いていただきたいというのは本意でありますので、先ほどの話にありましたが、次期教育大綱を 1 から作るというよりは、うまく今あるものを活用していきたいと思っております。

今の状況を見ると、総合政策課をはじめ市長部局はそんなに教育に詳しくないという部

分があります。もちろん教育大綱にある「地域」の部分の関わりはみるが、その前の部分というのは聞き取りを重ねて作成しているため、仕事が2度手間になっているところがあります。教育委員会がまとめたものを、聞いたものをまた市長部局がまとめて表にして、ということになっているので、そこは随分と合理化されると思います。

現在市が、今後の財政状況でなんとかまわるように態勢を見直ししている部分ですので、教育委員会の今果たしている業務に支障があるということであれば、チームでサポートしていかなければならないと思います。仲谷局長、いかがですか。

<仲谷教育委員会事務局長>

もちろんこれからも総合政策課に協力をお願いしたいと思っています。

<並河市長>

教育委員会に丸投げして、市長部局は一切関わりませんということではありません。これまで通りチームとしてしっかりやっていきたいと思っています。ご配慮、ありがとうございます。

ほかにご意見等ございますか。

来年やっていく中で不都合等がある場合は、率直におっしゃっていただけたらと思います。引き続きよろしく願いいたします。

それでは、次の案件「3. 前回会議のフォローアップ」に入っていきたいと思います。説明をよろしく願いします。

<事務局 三喜田総合政策課係長>

前回の総合教育会議では、「1. 基礎学力の向上」、「2. 不登校について」という2点の大きなテーマご議論いただいております。

その際に、それぞれのテーマに1つずつご指摘いただいた事項がありました。それについて、まなび推進課よりフォローアップというかたちでご回答させていただきます。

<高山まなび推進課長>

まなび推進課でございます。前回会議のフォローアップということで、当課綿谷からご報告させていただきます。

<綿谷まなび推進課指導主事>

まず、「基礎学力の向上」について、市で統一した取組があつてはどうか、というご意見をいただき、現在統一して進めている取組は2点あります。1点目は、「まなびタイム」というものです。特に低学力傾向にある児童を対象として、各校の実態に応じて、放課後等

の時間を使い、「補助学習」のかたちでやっております。

もう 1 点は学力向上の基礎となる自己肯定感の高まりを目標として、教育長からご紹介いただいた「ほめ日記」というものを学校に配布して、各校において自分のありのままの姿を認めて褒めていこうという短作文を進めております。この取組は、まだ全学年ではないですが少しずつ始めているところです。

基礎学力を高める取組はあくまで教員からこの取組を進めていきたいと、自発的に出てくるのが本来望ましい姿ではありますので、国語、算数、理科については学力テストがありましたので、それぞれの部会を小学校・中学校で開催し、現在やっている取組であるとか、今後やっていきたいことについて案を出し合っているところです。

具体的には、たとえば国語でしたら、書く力が課題となりましたので、いろいろなアイデアを出して、短作文への取組のアイデアが交流されているところで、「それはいいね」「その資料ちょうだい」など、交流を深めている状況です。

数学や理科につきましても、記述式の問題で、子どもたちが苦勞している面もあるので、記述式に強くなるにはどうすればよいか検討しているところです。以上です。

<並河市長>

1 個ずつ見ていきます。「まなびタイム」にしても「ほめ日記」にしても、やってみて、皆さんの状況はどうですか。

<綿谷まなび推進課指導主事>

すぐに結果が出ることではないですが、「ほめ日記」にしてもずっとやっていく中で、自分自身を認めていく姿であるとかを、単に子どもと先生だけではなく、保護者も交えてトライアングルでほめ日記をしているので、自分自身のことを見てくれている大人が周りにいるんだな、と、自分はこうでいいんだ、ということが少しずつ実感できるようになってきていると思います。

「まなびタイム」についても、一斉授業の中でなかなか自分のペースで学習できない子どもたちを、できるだけ個別指導に近いかたちで、指導者に入っただけなので、自信ややる気が出る、ということに繋がっていると聞いています。

<並河市長>

「まなびタイム」と「ほめ日記」について委員の皆さまから何かご質問等ございますか。

<田中委員>

今「ほめ日記」をやっているところは、何校くらいありますか。

<綿谷まなび推進課指導主事>

全学校ではないですが、ほとんどの小学校で実施しています。

<田中委員>

一番大事なものは、自尊感情を持っていない環境にあった子どもに、集中しないとイケないというものもあるのですが、そのあたりいかがでしょうか。

<綿谷まなび推進課指導主事>

担任が子どもたちの様子を見る中で、ちゃんと見極めていきながら、丁寧な関わり方が必要だと思います。

<田中委員>

そういう意味で、今取組まれている部分に対して、今後点検が必要です。

担任同士で情報交換する場所をどうするのか、というところも配慮していかないと、格差が生まれてくるので、そのあたりは必要ではないかと思います。

<綿谷まなび推進課指導主事>

国語の主任者会議の中で、現在こんな風にやっているということで、情報交流を行っております。お示ししているようなトライアングル方式を採用しているところは多くないので、各校の様子を見ながら、「もっとうちも頑張らんあかん」とか「その方法いいな」とか「ぜひうちもやってみよう」というかたちで広まっていったらな、と思います。

<並河市長>

いつからはじめましたか。

<高山まなび推進課長>

2学期からです。

<並河市長>

まだ1年も経っていない状況なので、やったことによってどういう効果がおきるか、というのは、継続的に見ながら改善を重ねていけたら、というように思います。また、やはりおっしゃったように自尊感情を強く持つことが今までなかったかもしれないお子さんが、元気になって前向きに捉えてくれるのが本旨だと思います。

<田中委員>

もう1点ですが、この「ほめ日記」のベースはどこで作られたのですか。

<綿谷まなび推進課指導主事>

ベースは学校で作りました。

<田中委員>

1点気になることは、親、先生、自分に加えて「まわりの子どもたち」も加えて、まわりの子ども認めてくれるような仕組みも作っていけば、より自尊感情やお互いに認める力も付いていくのではないかと、思いますがいかがでしょう。

<高山まなび推進課長>

先ほど申しましたように、各学校でアレンジしていただきまして、個別のほめ日記に加えて、「チームほめ日記」というものも実施しています。これは、各班でその日のうちに「今日〇〇さんはこんないいことをしてくれた」などを褒め合うほめ日記も実施している学校も出てきています。

<並河市長>

ほかの人のいいところを認め合う部分を大事にしようという取組かな、と思います。他にはいかがですか。

<名倉委員>

中学校のほめ日記のやり方はどうなっていますか。

<綿谷まなび推進課指導主事>

中学校ではほめ日記というかたちではないが、教科ごとに個別に取り組みがあります。ただ校園長会では紹介はしていますので、そういった要素を取り入れながら、各授業の中で取り組んでいる先生もいるようなので、まだ全体的ではないですが、今後中学校にもそういった視点で、子どもたちが書いていけるようなものを広めていけたらな、と思います。

<名倉委員>

やはり中学校のほうが進めていきにくい部分があると思います。特に中学生の自己肯定感というのはもっと上げなければならないですが、中学生で急には上げにくいと思います。中学生の特質を捉えた、その学校で良い意見ややり方、取組があれば、皆さんで広めていってやっていっていただきたいな、と思います。

<並河市長>

ほかにはいかがでしょうか。

<西畑委員>

自己肯定感を育てることはすごくよくなっていくと思います。今ちょっと拝見したかぎりでは、やり方が先生方によって少しずつ違ったりする中、部会が開かれてお互いのものを見合っ、良いものを取り入れていっていると思います。

ただ、もともとのお話として基礎学力の向上という部分があり、文章をきちんと書けるようにしていく必要があるとの認識のもと、その題材として「ほめ日記」があるというお話だったと思います。それで、ちょうど一番上にある「トライアングルほめ日記」には冒頭に「書き方」が書かれています。こういうふうなものをできるだけ取り組んでいただきたいと思います。自由に書きなさい、と言われて自由に書ける子どもは、なかなか少ないので、やはり「書き方はこうですよ」とか、自己肯定感を高めながら、書く力というのを伸ばしてもらう、という取組を引き続きやっていただきたいと思います。

<綿谷まなび推進課指導主事>

段落構成や、どうすれば書けるようになるか、というのも主任者会で意見は出ていますし、それを研修テーマとして取り組んでいる学校もあるので、そういった形も広めていって、みんなで共通でやっていけたら、と思います。

<並河市長>

そのほかいかがでしょうか。

<名倉委員>

「まなびタイム」についてですが、それぞれの学校が違ったかたちで細かくやっていたいっているな、と思います。特に少し学力の低い子をフォローする、というかたちで指導されているというのは学校訪問でも聞かせていただいておりますが、やはり小学校の勉強や学習は入ってくる段階で、学校側がいくら頑張っても無理で、いかに家庭学習が必要かということです。学校が教えた勉強・学習だけでは限界があり、やはり家庭で復習をしていかないと、人それぞれ習熟度が違ってきます。そういうことを学校側が保護者にうまく伝えていただく、というのも大事になると思います。

「まなびタイム」をされているのと同時に、低学年のころから習慣づけをして、ことあるごとに話をさせていただきたいと思うのですが、現状はいかがでしょうか。そういうことを伝える場というのは、なかなか無いのでしょうか。

<綿谷まなび推進課指導主事>

いえ、「学習の手引き」に、この学年ではこんな学習の仕方をしましょう、とか家庭学習ではこんなことが大事ですよ、とかお伝えすることはありますので、それをしっかり伝えていけたらと思います。のちほど、樺本小学校のほうからありますが、自主的にそういった学習に取り組んでいく、という地域を巻き込んだ取組をされていることもあります。

<並河市長>

やはりご家庭の状況は相当多様化しておりますので、お子さんを大切に思われていても、放課後の時間にどれだけ寄り添えるか、結構差異がある部分だと思います。そんな中、我々

としては家庭学習が大事です、と言いますが、日常的に塾等に行く方とそういう状況ではない方と、事情はさまざまだと思います。どんどん格差が広がることにならないように、やはり一定程度同じような取組の中で、課外の時間に自分がどういうふうに学んでいけばいいか、ということはある程度道筋をつけていかないと、なかなか格差の拡大というのは止められないのかな、と思います。そういう点でも、後ほどご紹介しますが、櫛本小学校の取組は素晴らしいな、と思っております。

ほかにはいかがでしょうか。

<田中委員>

先ほど、西畑委員がおっしゃったことの中で、大事なこととして、たとえば「書き方を教える」について、果たして、「ほめ日記」はそういうものなのでしょうか。いっぱい書くことで喜びを感じさせるという手法もあります。「こういう使い方・書き方をしてはいけない」「こういう表現はダメですよ」と注意する先生がかつていましたが、こういうことを言われると、子どもは書きたくなくなります。そうではなく、間違ってもいい、変な書き方でもいい、そこを書かせていく中で「もっとこういうふうにしたらどう？」というのが、ほめ日記の良いところじゃないかと思います。最終的には西畑委員がおっしゃっているところまで持っていけないといけないと思いますが、そういうところを間違わないようにしないと、「書かされている」というようにならないようにしないといいと思います。

<並河市長>

やはり否定形で詰め寄られると、褒めているつもりが、気持ちが沈んでくると思うので、まず評価をする、その上で「こうやったらもっと良くなるよ」と導いていくのが大事なかな、と思います。

<森継教育長>

書くということで、自己肯定感を高める、肯定的に自分を捉えて、書いてもらう、ということで、いろんな書き方を各校で研究していただいております。先生方に子どもたちのいいところを認めてください、と話していたら、先生が対応していただいて、肯定的に捉えてくれているという子どもたちの割合も増えてきているようです。自分には良いところがある、と思う子どもの割合も成長段階で中学校では必ず下がりますのでね、また中学2年生、中学3年生で上がるようにしていきたいと思っております。

また、ここにもありますように、自主勉とか自主学習ノートを使って1時間以上勉強する子どもの割合も増やしていけるようにして、細かい取り組みも各校でやっていきたいと思っております。

<並河市長>

今日の会議の事前打合せのときに議論していましたが、記述式や応用問題で課題がある、というお話を伺いましたが、最近さまざまな事例を見させていただく中で、AI 研究の裏返しで結構注目を集めている部分ではありますが、そもそも問題が分からないというわけではなく、「問題で何を問われているのかわからない」「わからないが故に答えようがない」ということで、今聞かれていることはこれだ、ということの説明をあげると実は解ける、ということがあります。問題で使われている用語の意味をきちんと理解せずに進んでしまっている、「わからないものがわからない」という悪循環に陥ってしまっています。そういう中で、教科書の朗読をさせるが、果たしてその意味を分かっているのか、あるいは記述の応用問題であれば、解く以前に今何を聞かれているのか、ということを理解しないとダメだ、という事例がありました。それがまだ AI はできないそうです。キーワードで検索し、その関連性で言葉を選んでいく、つまり読んでなくて、そこから選んでいく、偏差値は 57 で止まっており、そこから足踏みしている状況です。ただ 57 でも平均的な児童よりは上になっています。その点については、少しご留意いただきたいと思います。

次のフォローアップ項目「不登校対策について」に移りたいと思います。よろしくお願ひ致します。

<綿谷まなび推進課指導主事>

前回ご意見いただいたのは、スクールカウンセラーについて、人数が足りているかどうかということでした。時間で言いますと、足りています。派遣されている日と相談状況を確認すると、1日6時間(6コマ)ある中で、1日全部埋まっているということではなく、1日に1コマずつは空きがある状況です。ですが、日によっては、コマ数を超える相談があったり、突発的な相談が起こったりしたときに、今日はスクールカウンセラーがいない、ということも起こっています。ですので、県にはできるだけ時間増をお願いしているところで、急を要する案件があった場合には、教育総合センターや市の臨床心理士を学校に派遣している、という状況です。

<並河市長>

何かこの件について、ご質問等ございますでしょうか。

対策全般については、引き続き重要な課題ですので、今後ともこの件については、改善していただきたいと思います。

それでは、次の案件「4. 地域と学校について」に入ってまいりたいと思います。説明をお願いいたします。

<事務局 三喜田総合政策課係長>

今回は3つのテーマを会議で扱う、と決めさせていただいております、「基礎学力の向上」「不登校対策について」は前回の会議でご議論いただいたところでございます。本日は、「地域と学校」というテーマでご議論いただきたいと考えております。先ほど市長からありましたように、「地域と学校」ということで先進的な取組をされている櫛本小学校の伊勢校長先生にお越しいただいております。伊勢先生には、お手元の資料P6からP10まで、それと本日お配りしました当日資料に基づきまして、櫛本校区での取組をご紹介します。地域と学校のあり方等につきまして、ご議論・ご提言をいただけたら、と思います。

それでは、伊勢先生よろしくお願い致します。

4. 地域と学校について

<伊勢櫛本小学校長>

前回の打合せで「着てプレゼンしたら？」と言われたので、「夢ふれあい茶屋」のエプロンを着てきました。3学期本校が新しいプロジェクトを立ち上げて、昨日から開店しています「夢ふれあい茶屋」。学校の中に毎朝お茶屋さんを作ろう、ということで、昨日は高齢者の方4人、今日は3人お越しいただきました。

今日は、ほかの地域や学校でもできるような参考になるポイントを、ということで、3つのプロジェクトのことをお話しますが、今までどのように失敗しつつも発展してきたか、という流れもお話させていただきたいと思い、パワーポイントを作ってきました。

P7を見ていただいて、私が赴任した4年間の中で、学校がやってきたこと「図書館」「町カ（まちか）塾」「夢応援プロジェクト」のお話をしたいと思います。

前（パワーポイント）見ていただいたら、これは図書館の様子で、幼稚園の保護者に開放しています。また、新しい公民館の3階では、放課後学習塾「町カ塾」をしています。そしてこれは、「町カ塾」で貯まったポイントを使って、自分でなりたい職業の申請をできる、というシステムです。

この写真のパティシエさんの隣にいる子は、公民館の「親子クッキング」で、ケーキ作りを申込みに来た子で、事情があっとうちの方が来れないということで、館長さんに「ごめんね、おうちの人来れへんかったらあかんねん。」と断られて泣きながら帰った子なんです。そのあと館長さんから「かわいそうなことをした。来年度は子どもだけでも参加できるイベントにするわ。」との電話がありました。その子は自分で貯めたポイントで、お菓子作りをし、そこで焼いたクッキーを町カ塾に持って行ってみんなに食べてもらいたい、ということで、自分の家に持って帰らずに、町カ塾に持って行ったそうです。

「みんなのとしょかん」の今の姿を本日の持込資料に載せています。見ていただくと、1番右端の写真でわかるように、大人の方が喋っているコーナーがあり、そこには、大人用の本を置きだした、という。そういう風に発展しています。

子ども同士で読んだり、親子で読んだり、あるいは小学生に読んでもらったりする、という空間になっています。もう1つ、親子さんの関心がかなり低い学年もあります。なので、毎回校長の手作りプレゼントを作って、毎回来た子にプレゼントする、というのをやっておき、2月は必ずひな人形を作る、ということになっています。

市長や教育委員さんは、すでにご存じだと思いますが、この3つのプロジェクトの写真集を見ていただけたら、と思います。(写真集回す)

まず、私が赴任した2015年の図書室の利用状況がどうであったかという点、ずっと高学年の生徒が落ち着かなかった状況があって、図書室は、低学年は使用禁止、高学年は教室図書充実する方向になっていました。私が赴任した頃は、遮光カーテンが閉まっている誰もいない図書館でした。「なんとか図書室に人を入れないと」ということで、図書ボランティアさんを導入しようと考え、コーディネーターの森田さんに、長寿会役員の深川さんを紹介してもらって、長寿会にやっていただけてはどうか、というアドバイスをいただきました。当時森田さんは「コーディネーターを辞める」とおっしゃっていましたが、「学校というのは、私のものでも教員のものでもない、地域のものでしょ。地域が学校を育てていったり、どんな教育をするか、どんな子育てをしたいかを考えて、学校を利用してもらうんなあかん。私たち教員は預かりママ、雇われママみたいなもので、子どもたちをお預かりしているだけなんです。」ということを申し上げてご理解をいただきました。そして、長寿会をはじめとした高齢者の方に図書館に来ていただくことになり、最初は週2回誰もいない図書室の拭き掃除から始めてくださって、それを見た職員が「自分たちも掃除したり工夫をしないといけない」と変わってきました。

その翌年、樺本公民館でタウンミーティングをした際、市長が「天理市は子育て世代が減少して税収入が落ち込んでいる、大学生がすごく多いのに子育て世代がどんどん出て行ってしまふ、これをなんとかしなくてはいけない」「樺本地区が福住以外で一番高齢化が進んでいる」というお話をされました。

また、森継教育長によると奈良県内の全国学力調査で、他の市内と比べてときに、樺本小学校の図書館の利用率は最低だそうです。県ともかなり差があいていて、市内9校の中でも最低で、子育て世代に来てもらうには、市内のどの学校も魅力ある教育活動をしなないとはいけません。高齢者の方に小学校に自由に来てもらわなければならない、どんどん来てもらって学校がまなびのセンターみたいになったらいいな、と思っています。

これも教育長から教えてもらったことですが、県下トップ20の学校とワースト20の学校の学習条件の差が、一番大きなポイントは何か、というと、そのひとつは「図書館・図書室の利用率」だったそうです。そこで、図書館改革をしよう、と学校図書館を「地域みんなの図書館」にしてしまおう、ということを考えました。そこで、幼稚園児・小学生の保護者に来てもらうために、幼稚園児に小学校の図書室を開放しました。リビングのような空間にしようと、たとえば、レースのカーテンを引いたり、畳を敷いたり、ローテーブルを置いたりしました。また、天理の図書館に行くように天理市の図書館コーナーを必ず設けよう、それから、子どもたちの作品の発表の場にしよう、いろんな絵を描いたり、子ど

もたちの作品がそこで見られる、子どもたちも自分の作品が教室だけではなく、「こんなところに貼ってもらってる！」と思うようなディスプレイをしよう、というのと、投句箱を設置して、表現をしていこうということで、子どもたちの俳句が載っている句集が出来ました。今日持ってきたので、ぜひ見ていただきたいと思います。今は第 2 集を制作中です。

2017 年度は預かり保育園児にも開放しようということになりました。子どもを預けて仕事に行っておられるおうちには、なかなか子どもに本を読んであげられないだろう、と預かり保育にも開放しよう、PTA の文化部にも参入してもらおう、ということで、じつはさっき持込資料で見ていただいた、大人の人たちが読んでいる本は PTA の予算で購入した月刊誌や料理の本で、そういう本を集めた大人の本のコーナーを作りました。

また、子どもたちが、図書ボランティアさんやコーディネーターさんの姿を見て、本の読み手になっていきました。高学年の子どもたちが、幼稚園の子どもたちに本の読み聞かせを行うようになっていったのです。

また、ボランティアさんのほうも、町で子どもたちに声をかけてもらうようになって、ニコニコしました。長寿会の会長さんにお聞きしたのですが、ある日の長寿会の会議で、ボランティアに来てくれている方の奥さんが旦那さんについて、「うちの旦那、小学校にボランティアに行くようになってから変わりました。近所の人に挨拶もしなかったのに、子どもに挨拶してもらって嬉しいのかニコニコするようになって、ついには区の評議員を引き受けてびっくりしています。」とおっしゃっていた、という話を聞きました。会長さんは、ここで「私たち大人も学んでいる。子どもたちだけが学ぶ図書館ではない。」とおっしゃいました。この活動をひらがなで「みんなのとしょかん」と名付け、みんなが使っている、人と人のつながりを付けるということで、教育長がおっしゃった「社会力」を高めていくことが、この図書館の目標となりました。そしてみんなが学ぶ、センターになっていったらということで、2018 年度は学童保育児童にこそ使ってもらおうということになりました。学童の先生がいつも嘆いてらっしゃるのは、親御さんが忙しいので、夕飯の準備をするときなど、つつい子どもにゲーム機やスマートフォンを与えてしまう方が多い、とのこと。学校は税金でやっているのだから、もっと自由に使ってもらったらいいと思います。体育館も運動場も使ってもらったらいい、夏休みや冬休みなど、施設は空いてるんやから、使い倒してもらったらいい、ということで、学童保育は毎週使っていただいています。

そして、高齢者ボランティアの輪をもっと広げようということで、はにわ祭りで児童俳句を掲示して、図書ボランティアさんがいいと思う俳句を選んでもらって発表してもらいました。この次の日にお礼を言いに行ったら、80 歳のボランティアの方が、「人前でこうやってしゃべらせてくださって、私たちが勇気・力をもらっているんです」と言ってくれました。この方は最初は本当に口数の少ない方だったのですが、今は「なんでも用事があったら言ってください。」と言ってくださいます。

子育て世代の方が「こんな小学校に入りたい」「小学校でこんなことやってるんか」と言

ってくださいたらなあ、と思っています。

次は「町カ塾」ですが、小学4・5・6年生対象で月1回開催しています。月1回で学力が伸びるのか、というところですが、これには仕掛けがあります。ひとつは「積極性」です。町カ塾は、勉強以外の習い事の種類の非常に多いのです。小学4・5・6年生の4分の1以上が、ひとり親家庭です。就学援助も80人を超えています。かなり生活が厳しいです。こうした現状があって、年収もかなり低い家庭が多い、その低い収入の中でも勉強以外に習い事に行かせて、そこで子守りをしてもらっている家庭も多いですので、放課後学習をすると「この子にこそ」と思う子どもは来てないのです。そこで朝の30分のモジュール学習を行い、それと町カ塾をリンクさせようと考えました。町カ塾では、1年生～6年生までの説明文のプリントを作りました。4社の国語の教科書から、説明文を全部抜き出して問題を作ります。一方、朝のモジュールでは、同じように物語文だけ抜き出して、問題のプリントを作ります。こうすることで先生から学校に「残りや」と言われるのではなく、家に帰ってから自分で「さあ勉強しに行こう」という積極性を育てる、というようにやっています。

この町カ塾の運営は町の人がやっていて、私たち教員がするのは後片付けと準備と問題を作ることです。運営をしているのは町の人なので、子どもたちは町の人に感謝する、この「積極性」と「感謝」というのが、必ず学力の下支えになる、と思います。子どもたちが「この地域に生まれてよかった、ありがたい」と思って、だから集中する、というように私は思っています。

櫛本小学校では、「おくすり手帳」からヒントを得て、「ほめ日記」をアレンジした「町カ手帳」というのを考えました。町カ塾が45分終わったら、2～3分で今日頑張ったことを書く手帳です。見本を回しますので見てください。

市長が以前に、しんどう子はどんなことを書いているのか見たい、とおっしゃいましたので、しんどう子どもの書いたものも含まれている手帳もあえて持ってきました。個人情報なのでどれとは言えないですが、見てもらったらすぐにお分かりになると思います。特別支援の子も町カ塾に来ています。1年から6年生までのプリントも揃えていますので、特別支援の子も来てくれています。このプリントも見ていただけたらと思います。それと、必ずチェックリストがあって、これを見ると自分がどんな勉強をしたかがわかります。A～Fまでの文章題があり、1年生がAで6年生がFです。だから5年生でも1年生からやったらいい、漢字も1年生～6年生まで全部あります。

中学校の前の校長先生が、中学校に入学して1週間後に基礎的な国語と算数の授業テストをしたところ、6年生の漢字の定着率は4割だった、とおっしゃっていました。5年生の定着率は5割、というデータも見せてもらいました、そこで1年生～6年生までの漢字を復習しませんか、というプリントを作りました。計算も3年生からです。

先日、その校長先生から、入学して1週間の基礎的なテストの結果が、櫛本小学校出身の生徒の点数が3年連続10ポイントずつ上がっているよ、という嬉しい話をお聞きしました。私はこの取り組みが必ずや近い将来の学力向上に繋がってくると思っています。

「町カ塾」ですが、校区の実態です。事件というのは、5時半まで迎えに行けません、というシングルのご家庭があり、子どもが万引きをしてしまって、お店の人も「ひとりで寂しいのかな」と大目に見ていたが、もう3回目ということで警察に連絡しました。警察がお母さんに2時半頃連絡しましたが、5時半まで迎えに行けない、今行ったら仕事をクビになります、と言われたので、警察が困って学校に連絡してこられたことで、学校で万引きの事実が分かったという事案がありました。また、不規則な勤務のお母さんが寝ているのを起こさないように、ごはんも食べずに家を出て学校に通っている子どももいます。

そのような状況がある中で、私は、やはり「居場所づくり」が大事だと思います。自分から勉強を取りにいこう、そういう態度を育成しよう、地域と学校が共同で公民館でやろう、「自分たちには家の人がいないときでも公民館がある、助けてくれる地域の人がいる」子どもたちがこう思えるものを作ろう、ということで「町カ塾」をプレ実施しました。6年生を対象にやったところ好評だったので、もっと積極的にやろうということで、「地域通貨を導入してはどうか」「ワンコイン塾(100円)はどうか」などいろいろ検討した結果、櫟本の由来となった櫟の木をデザインした「町カカード」という会員証(ポイントカード)を導入することになりました。学校が終わって家に帰ってそこから勉強しに町カ塾に行く、という積極性は将来絶対役に立つと思います。

2017年度は、4、5、6年生を対象に本格実施をして、夏休みだけは毎週やろう、ということになりました。地域の人がそれやったら食堂やってあげよう、ということで「町カ食堂」も開店しました。そしてこの年に、町カ塾で貯めたポイントが上位の子どもから「夢申請書」を出してもらって、その人の夢を応援するプロジェクトを始めました。この申請書はしっかり書かないと受け付けてもらえない、こんな職業になりたい、という作文を書いて、11人出しましたが、7人が失格で、書き直しと返されて、それでもう1回書いてきて、11人全員合格することができました。今年は、冬休みもやろう、ということで冬休みも町カ食堂をしました。今回から大学生や高校生に塾長をやらしてもらおうということで、1日塾長として来てもらいました。子どもたちはやはり、自分も将来大きくなったらあなりたい、というモデルが見える、しかもその塾長たちが夢を語ってくれる。これは高校生が夢を語っているのですが(パワーポイント)、自分の家業が健康食品をやっている、と、その健康食品のリハビリとか、そういうのを含めて、健康寿命を延ばす、そういう夢があるということ語ってくれる、そういう夢を語るプロジェクトが新しくできました。

これらのことが全部できたのは、地域と学校がともに会議を開いて話し合っているからです。校長のリーダーシップがあるのだな、と思われるのですが、私は広報担当をしているだけで、ああでもない、こうでもない、ということで、みなさん自分事として考えておられます。なんで自分事かというと、この学校が校長のものでも、教職員のものでもない、僕たちはお預かりしているだけ、僕たちは天理市や子どもたちの未来と一緒にあって応援する、そのために学校を使ってくれ、ということをやったので、みんな本気になってくださった。子どもたちの夢を応援しよう、子どもたちの未来をちょっとずつ応援しよう。私がしたことによかったと思うのは、私はあくまでサーバントリーダー(支援

型リーダー)に徹したことです。段取りはするが、「こういうふうにしなさい」とは言いませんでした。地域の方は自分たちの決めたことだから頑張るんです。今日プロジェクト会議をする、今日お配りした資料も、事務職員が「こんなん作ったんです」といって持ってきてくれたんです。

会員制の団体を櫛本北部活性化プロジェクトの中に立ち上げていただいて、今のところ会員人数 116 名、校区区長会、校区民生委員会、蔵之庄商工会の 3 団体が関わっていただいて、全部で 352 口、352,000 円が年会費として入ってきています。

収入があることで、先ほどの高校生の 1 日塾長にバイト代が払えました。また、今度「マリアージュ」に行く子どもたちなのですが、マリアージュの許可を得て、コック帽をプレゼントできました。この前は、「車検のコバック」という車の会社に行ったのですが、そこでは名前入りのつなぎをプレゼントできました。プロ野球選手や graf さんもこのお金を使って来ていただきました。

子どもたちに夢を聞いたら、夢が少ないのです。もっと多様な夢があると思います。来年はトラック運転手と呼んでくる予定なのですが、いろんな職業があるよ、いろんな夢があるよ、ということのをこれで与えていこうということを思っています。先週は高井病院に行って、看護師長さんのはからいで、心臓のスキャンを見せてもらったり、実際に CT に入っているところを見せてもらいました。

資料の P10 には今年の「夢応援プロジェクト」の一覧が載っています。このプロジェクトは町カ塾の高いポイントの子どもが申請して、その申請作文が、第 1 次審査「プロジェクト協議会」、第 2 次審査「校区区長会」を通過した場合に、子どもたちのなりたい職業のプロフェッショナルをいろいろな方のネットワークで呼んでくる取組です。「知り合いの知り合いは皆知り合い」ということで、車の整備士はコバックさん、カメラマンは学校の卒業アルバムの業者さんをお願いをしたり、プログラミングは近大高専の先生に来てもらっています。これに必要な費用もこの会費から出しています。

学校を高齢者が集う場所にとすることで「櫛本夢ふれあい茶屋」を始めました。この名称を考えたのは、事務の井田さんで、井田さんが店主です。

これから高齢化社会だというのが、本当に高齢者に思いを馳せる子どもたちが育っているのか、核家族がすごく多いので、お年寄りを知らない子どもが多い、そうしたらお年寄りにどんどん学校に来てください、一緒に登校してください、と言っています。旗当番のように順番決めて立ってくれとは言っていない。子どもらみんなと一緒に学校行こう、みたいな感じで後ろから付いてきてくれたらいい、追い越す子どもたちと一緒に話してくれたらいい、とそれが見守りになると言っています。それで学校へ来たら「櫛本夢ふれあい茶屋」があって、そこでお話してみんな繋がりてもらったらいいということです。これらのことで、高齢者に思いを向ける子どもたちをみんな育てませんか、高齢化社会というなら、高齢者が豊かになるシステムを学校を利用して作りませんか、という試みです。

学校は誰のものか、これははっきり言えます、「地域のもの」です。ここを勘違いしなかったら、地域の人は皆手伝ってくれると思っています。どんな教育をどんな子育てを誰が

するのか、これはもちろん地域です。だから樺本小学校では「学校の応援に地域の人来てくれ」ではなく、「学校を利用して地域づくりを応援する」ということです。ですから、よく県の会議とかに行ったら、こんな力のある人を呼んで、こんなことしてもらったら、みたいな話をされますが、うちはそうではなくて、学校が地域を応援する一員になりたいねん、という話です。

そして「企業」としての戦術を作ることが大切です。

税金を使っているのだから、税金を無駄にせず有効活用しようということで、「外回り営業」と称して、あっちこっち自転車で走り回って趣旨を説いていきました。2年前までは、単車で回っていたら、JA さんに「校長先生、また外回りですか」と声をかけられるくらい回りました。

それと早めの見切りと作戦変更が大切です。「みんなのとしょかん」で3組しか来ない月が2月続いたのです。「そんなんあかんやろ」「あかんと思ひよ、そんなん会社やったら倒産してるで」「これが当たり前やと思ってるのは学校やからやろ」と言いました。

町カ塾も7人しか来ないときが2回ありました。その時も地域の人を呼んで「そんなん倒産やで。なんとかしようよ。」と。私が言ったのはこれだけで、あとは皆で「どうする?」「ああしたらどうやろう?」と考えてくれるんです。「じゃあ広報活動しよう」と事務の子が言いました。「幼稚園の参観日にプレゼンに行こう」と言って行ったんです。すると15名集まってくれました。広報活動をしようということで、会員に継続会員になってもらうために、事務の子が「こんなチラシ作ってみたんです、これやったら入ってもらえるんじゃないですか。」って見せに来てくれました。こうやってそれぞれ担当が考えてくれるんです。先ほどの P10 にありますが、必ずイベントごとに地域と学校職員の両方の担当が入って、それぞれのイベントにリーダーがいる、だから皆がやる、考えてやっている、命令されてやっているのではない、このプロジェクトは自分がリーダーなんやから、地域の人と話し合っ、どうしたらいいか、話しませんか、ということでやっています。

それと、コミュニティスクールについてですが、私は入れ物やと思っています。コミュニティスクールでは、こんな課題があるからこれをしたい、というのを作っておかなければなりません。学校運営協議会で報告書等の文字だけを読んで字面で承認してもらうのではない、こんなことやってます、ここに参加してどう思いましたか、もっとこうしたらいいんじゃないですか、これはこのままでいいですね、これは実際に参加してもらわなかったら承認なんか得られません。字だけ見たって、ただ単に「いいですね」と言うしかありません。

さらに、人とお金を生み出さないと継続できません。この先10年やろう、というのが合言葉なのです。10年後、子どもたちが「僕らが今度講師になって行くわ」と言ってくれる子が出たときに、これは成功やった、と言えます。そのためには運転資金と運転する人を生み出していかないとだめで、だからまずはプロジェクトを作ろう、ということでプロジェクトを作っています。最初このエプロンのプロジェクトは、「子ども夢見守りプロジェクト」と言っています。みんなで子どもの夢を見守っていき、そして夢ふれあい茶屋でふ

れあおうということでやっています。うちが回っているとしたら、いろいろ課題はありますが、こういうことを意識していかないといけないと思っています。だから、毎週毎週と言っていいくらい新しいことが生まれるのです。だから面白い。うちの教頭先生も、「滅茶苦茶忙しい。でも滅茶苦茶やりがいがありますねん。」といつも言っています。

その今回している写真集も、作れ、と言って作ったのではなく、職員が勝手に作って、「こんなん作ったんですけど、もっと作っていいですか。」と持ってきたのです。句集も図書館のプロジェクトの職員が作ってくれました。そうやって出来てきたものなのです。町力カードも話し合っただesignを自分たち作ってくれました。

1つ大きなこととして、事務職員の人が学校の運営に関わってくれていることがあります。写真の事務職員の澤井くんは、うちに腰掛けのつもりで来たのですが、1年うちの小学校にいて、これを一生の仕事にしたい、と思って今年、県の事務職員の中途採用の職員採用試験を受けて通って、来年は違う小学校に行くのです。右側は県費事務職員の井田さんです。彼のアイデアでこのエプロンもできたし、暖簾もテーブルクロスもやろう、ということで、月に一回紅屋のおはぎを入れてもらえるということができたので、こんな今月のメニューっていうのを掛けて、お茶屋さんをやったらいいなあと思っています。

雑駁な話になりましたが、櫛本小学校では大人たちの教育コミュニティが小学校を中心として作られつつあるのではないかと、そのために皆が、こんなんやったらどうか、ということいろいろなアイデアを持ち寄れたのではないかと思います。それは社会力を高めるということで、厳しい環境におかれる子が多い地区において、子どもたちのセーフティネットになりつつあるのではないかな、ということを手前味噌で思っています。

以上です。ありがとうございました。

<並河市長>

ありがとうございました。素晴らしいという言葉では、不十分でありますけれども、いま私も北部の街づくり協議会でも主要案件ということで、私も施政方針に毎年のように「櫛本モデル」という言葉を使っております。まさに校長先生、事務職員さんを含めた学校の皆さんと地域の皆さん、お子さん方で、これだけ深めていただいた。教育大綱の最後にある「人づくりと街づくりをつなぐ重点施策」を挙げておりましたが、櫛本が突出するかたちで先進的に進めていただいております、地域自ら進めていただいている、と思っております、まだそれぞれの地域の事情があり、櫛本と同じことをやればいいことではないと思いますが、やはりこういう熱気があるのだ、ということは広めていきたいですし、今後じゃあ櫛本が、コミュニティスクールとして発展していくにはどうやっていったらいいかなあ、というところも一緒に汗をかいていけたらなあ、と思っています。

この間の打合せ会議でお話しておりましたが、どうしてもこれを頑張ってもらおうという「忙しい」、学校現場も一杯一杯であると思っておりますので、それにさらにプラスアルファでやる、という印象になりがちなのですが、単にやるべきことがプラスアルファになっているという発想ではなく、いい形で効果が循環している、ということで全然違うので

はないか、ということをおっしゃるんですけども、学校全体の濃度であったり風通しであったり、あるいは学校現場へのいい影響ということでお気づきの点がありますか。

<伊勢櫨本小学校長>

職員のやる気が高まって、朝のモジュールが町力塾と連動して行われました。また、結果ははっきり出ていませんが、本校では去年、公開研究授業を 80 本やったんです。これは奈良県で一番だと思っています。80 本やるというのは、職員の熱とバイタリティがなかったら出来ないと思います。この地域を作る活動をしながらやってくれました。いかに自分たちで時間を生み出しているかというのがお分かりいただけると思います。明日も 1 時間目、2 時間目は公開研究授業なのですが、そこで 1 時間限定して指摘のし合いをしてくれます。

80 本の公開研究授業をまとめて教育委員会に提出させてもらったが、それがあって職員がとてもやる気になっています。それは子どもたちが変わってきたからなんです。はにわ祭りでウォークラリーするときに、蔵之庄に蔵福寺というお寺があるんです。人権擁護委員の女性が蔵福寺でウォークラリーの見守りやサポートをしてくださっているんですが、今年、校長室でおっしゃったのが、「蔵福寺に来た子どもたちの靴がきちっと揃うようになった。2 年前まではぐちゃぐちゃだった。靴間違えるから、いつも靴持って走ってました。でも、去年と今年、靴が揃うようになった。」と。家の玄関の下駄箱を見てもらっても、靴がきちっと揃っていると思います。教師じゃなくて地域の方が仰るんですが、2 年前から、すごい緊張するねん。子どもたちの視線をすごい感じるねん。しーんとして見て、拍手で送ってくれるねん。」と。そうやって集中して静かを作れるようになったんです。これは全校朝会でもそうなんです。そして感謝の気持ちを持って授業やイベントに参加できるようになってきた。それを見て、教員や職員が元気をもらっているからかなあ、というふうに思っています。

それと、やっぱり校長が頼りないので、校長に全部任さんと僕らが担おう、と思ってくれているということがよくわかって、どんどん職員からこんなんでしょうか、あんなんでしょうか、と言ってくれるのは決して疲弊していないと言いますか、やりたいことをどんどん見つけてくれるというのは、その表れかなと思っています。

<並河市長>

ありがとうございます。ぜひ、みなさま何かありましたらどうぞ。

<名倉委員>

私、櫨本在住で、少しだけ関わらせていただいております。この 1 カ月、所用で行けなかったんですけども、1 カ月間でもものすごい進んで、本当にびっくりしました。「ふれあい茶屋」もできていました。そして子どもたちの積極性が高まってきたと先生がおっしゃったんですけども、今年の学校訪問で、先生方の意思統一というのがなかなか難し

い。先ほどの質問と同じで、消極的な先生方はどうなさっているんですか、と聞いたときに、今のようなお言葉を言われまして、子どもたちが変わっていく姿を見て、今まで消極的だった先生も、ちょっとでも手助けしたらいいかな、と気持ちが変わっていったんですね。ですので、積極性というのは先生方にもすごい浸透しているんだなあ、という気持ちが出てきてまして、ものすごくいい影響を及ぼしているなと思いました。

それと、高齢者も地域と関わることによって、自分のやりがいとか生きがいとかすごく感じておられると思います。櫛本の場合は、ものすごくうまいことしている例ではありますけれども、決して他の地域でやれないことではないと思います。その人たちにできることを少しずつやっていけば、形は変われど、どんどん進んで変化していきながら、また地域づくりに繋がっていくんだろうな、と思います。

<並河市長>

ありがとうございます。そのほかいかがでございましょうか。この櫛本の話というのはどのくらいご存じでしたか。

<田中委員>

学校訪問させていただいて、直接お話を聞かせていただいたんですが、まだ町カ塾を見たことがありません。

<並河市長>

私たちが、公民館を作ったときに3階部分を自習室にしたとはいえ、そもそも子どもが公民館に行く習慣がない中で、どれだけの子どもが行くかな、という不安も若干ありました。これだけソフト事業が充実していると全然違う。よくぞあそこに自習室を作ったな、と思うくらいです。

<田中委員>

「素晴らしい」というほか言いようがないんですけども、ただ学校が安定しないといけないのではないのかとは思いますが、したがって、学校を安定させたのは何だったのかな、というところを教えてほしいと思います。学校が安定しないと、いくら外と繋がろうとしてもできない。学校を安定させた取組があったはずなんです。どうでしょうか？

<伊勢櫛本小学校長>

実は4年前にいろいろあって、私も第三者委員会に出させていただいたり、顧問弁護士さんに会いに行ったりしていたんですが、そのときに職員が一致団結をしたんです。学校を守ろうということで、そのときにホットライン会議というものを立ち上げました。なにかトラブルがあったときに学級・学年に任せないで、みんなでチームで対応しよう、ということでした。先ほどもプロジェクトごとにリーダーがいる、と言ったんですが、

このチームにもリーダーがいて、一番長く学校にいる先生にホットラインを任せたとのことです。それを対応したというのが1つ。

もう1つは授業研究の研究指定を受けて、一昨年、去年と授業をしっかりといて、と、教育長がいつもおっしゃるように、ベクトルを合わせよう、この先生の授業はいい、ではなく、この学校の先生の授業はいい、というようにどの先生の授業を受けてもベースラインが同じような感じの授業を新学習要領に合わせて追究をしていこう、というように授業の追究をしていったんです。これがもう1つの取組です。子どもたちの様子を終礼で逐一報告して共通理解をして、同じスタンスで同じベクトルで進んでいくんだということをやりました。生徒指導も親をどう変えるかということも、各学級バラバラなことには言わないでおこうと決めています。例えばお知らせのプリントも3つに絞って必ず冷蔵庫に貼ってもらえる大きさと、1・2・3学期を同じ紙で色を変えて配ることとしました。毎年見直しはしますが、①家庭学習のこと、②早寝早起きのこと、③スマホのこと、というふうに決めています。お知らせプリントは冷蔵庫に学期ごとに色を変えて渡すので、家庭訪問に行くと、1学期のものが貼ったままか、2学期のやつをちゃんと貼ってくれているのか、というようなことも見えています。ちょっと小さい字で日時を変えたりしているんですけども、「お母さん違いますよ、これ変わってますよ。」とか言いながら、学校全部でベクトルを合わせた生活指導も行っています。そこに「櫛本小学校はどんな困難な課題でも相談に乗り対応します」と恐ろしい1文が書いてあるのです。解決できるかわからんけど、どんな困難な課題にも相談・対応・応援させてもらおうということで、意思統一ができたからこそ1本の筋があったと思います。

<並河市長>

徐々に皆さんの気持ちがまとまってきたということだと思います。今日発表いただいたものも極めて多岐にわたっていたので、今の状態で他の学校にお見せしてもたぶん圧倒されてしまって、すぐにこれだけ進むか、ということにもなりかねないと思います。これまで試行錯誤を積み重ねて来られたと思うが、最初私も伺っていたときというのは図書館の取組、皆さんと整理をして俳句作ったり、読み聞かせしたり、幼稚園の子どもを呼んだり、というところでのいい雰囲気みたいな部分と、従来からあった「はにわ祭り」と組み合わせる部分に、中心となっておられる森田さんや近藤さん、あるいは大阪・箕面市の事例を見に行ったりだとか、またこの町カ塾をやってみたりだとか、それでうちの協議会の場でも使って、まず区長さんからの理解も得て、地域としてそれを応援していこうという部分を取り付ける中で、粘り強くどんどん味方を増やしていかれたかたちになったのかな、と思います。特にこの1～2年くらいの勢いと言いますか、成果というのは素晴らしいな、と思うんですけども、最初に種になるような活動を作っていく中で、どう関わる人が増えてくるのが大事なんだろうなと思います。

今回のようなプレゼンというのは、今まで他の学校でもやったことはありますか。

<森継教育長>

校園長の皆さんに聞いていただいたことがあります。

<高山まなび推進課長>

各学校ここまでではないですけども、いろいろ取組んでいただいております。それぞれ地域性も含めながら、やっていただいております。あとはいかに、校長先生がおっしゃったように「学校は自分たちのものじゃない、地域のものだ。」というそのところをいかに啓発していくか、また教師の意識改革は言い続けてほしいな、と思います。

<並河市長>

他校区も全く何もやっていないわけではありません。福住に小規模特認校がありますが、毎日ほど地元の皆さんが来られて、ボランティアでやっていただいて、ほかの校区と比べて、樫本だけが地域が協力的で、他が非協力的である、とそういうことでは決して無い、というふうに思っています。ただ、今おっしゃっていただいたように、学校は地域のものだ、ということを校長先生がここまで徹底して言った上で、地元へ飛び込んでいくということにしては、やはり相当の違いがあるのかなあ、というところでもあります。

多目的教室だったり、図書館の開放であったり、どうしても行政の側から学校にこんなことはできないか、と言いながら初年度なかなか進まんな、みたいな議論をしておって、逆に地元からそれで安全確保ができるのかなどの課題が出て、いや運用規定があって、と言ってる間に、前向きな話をしていたはずが、どんどん空気が後ろ向きになっていってしまう、ということからすると、樫本では他がそういう議論をしてる間にもう3段階くらい進んでいるということです。これはなぜかということ、1番最初の根本思想の部分が非常にしっかりあるからなんだろうなあと思います。

<藤田副市長>

やはり根底に「学校は地域のものだ」との意識が根強くあるからできるのだと思います。

<並河市長>

地域がそれに応えた、ということですね。

<藤田副市長>

そうですね。どこの学校でもできるかもしれないが、そこをどれだけ意識できるか、ということです。

<並河市長>

子ども食堂というのは、他の校区でやっているのを区長さんが実際に見て、広がってきている部分もあるので、大変お手数ですが一度区長連合会とかで校長先生にお話いただく

機会を作らせていただけたらと思います。櫛本の区長会長はもう我が校区の最大の誇りのように学校のプロジェクトに係っていただいています。

<名倉委員>

従前に北部活性化プロジェクトという会議が自然発生的なものでありました。その中で、まず自分たちは何をしたいのかということや、皆で話し合ったときに、櫛本のまちがもっと栄えてほしい、いろんな人たちに櫛本のことを知ってほしいということ以外に、櫛本の子どもを皆で育てようという意見が多く出ました。そこからいろんなアイデアを出して、それを校長先生に相談に行ったという、事の起こりはそんな感じでした。やはり地域で子どもたちを見届けて育てよう、櫛本で育てて良かったな、と思ってほしいな、という気持ちで始まりました。他の地域も同じような気持ちはあるんじゃないかなと思います。

<並河市長>

潜在的にはあります。ただそれが本当に動き出すかどうかです。住民の皆さん全員ではないにしても、「協力したい」と思っているひとが一定数いるまちだと思っています。

<西畑委員>

地域によっては、「この校長先生は前の先生に比べると全然話しに来てくれへん」ということがあるのも確かです。伊勢先生がおっしゃるような「学校は地域のものや」という話をいくら考えていても地域と話ができてなかったら何もならない。伊勢先生は「外回り」っておっしゃってましたけど、そういうふうになされたからこそ上手くいったんじゃないかなと思います。

<並河市長>

それが、余分な仕事が増えるじゃなくて、学校自体の雰囲気と言いますか、非常に好循環が生まれているということをご自身の中に落ちるかだと思っています。

<西畑委員>

これからコミュニティスクールをやっていくことになっていくわけですから、校長先生も教頭先生もそうですけれども、もっと外に出ていただいて、たくさんの方とお話していただくのが、1番効果があるんじゃないかなと思います。

<並河市長>

これだけいい事例が市内にあるわけですから、もちろん他のところのをいろいろ研究するのもいいんですけど、まずこれを皆さんで議論してほしい、というところがございます。

<西田委員>

私も去年の秋にこのお話を聞いて、素晴らしいと思いました。この三角形のトライアングルの図も説明していただけてますけれども、核となる方の熱意が非常に大きいと思うんです。伊勢先生は自分のことを頼りないとおっしゃいますけれども、全くそんなことはないと思います。地域でも学校でも核となる方の信念・熱意、そしてそれを周りの方にお伝えしていく取組みが欠かせないと思います。このまま町カ塾が継続あるいは進化していくのは、そこに拠るのではないかと思います。地域に住む人や学校の先生は定期的に人が変わっていくということを考えると、これがしっかり根付いて定着していくためには、そのこともやはり見据えてこういうものを作り上げていくのが 1 つ大事な点かなあとと思います。

<並河市長>

今おっしゃっていただいたのは人事に関わることでもあるのですが、どの先生にあたってもしっかり樺本小学校としてはこういうところを作っていくのが非常に大事で、これがたとえば、キーパーソンが居なくなったらとたんになくなるとかであれば、まだ本来的に地域で作っているということではないのであって、今ちょうどそのフェーズが上がっていきつつある段階なのかなあ、というふうに思っています。

樺本のプロジェクトの状況というのはですね、地域と連携しているひとつのすごい事例として共有させていただきながら、他のところでどう啓発していったらいいのかということについては、教育委員会とも協議しながらやっていけたらと思います。

<森継教育長>

校園長会と教頭主任者会では取組みの概略をお伝えしています。ふれあい茶屋等を強調して紹介させてもらって、皆でできるんやったら、ということで伝えています。私も一度参加してみたいと思っています。

<並河市長>

他校区の区長さんにもぜひお伝えしたいと思いますので、よろしくお願い致します。

そうしましたら、案件 4 は以上といたしまして、5 番目の案件でございます。教育大綱に基づく主な取組状況について、事務局からお願いします。

<事務局 三喜田総合政策課係長>

前回 8 月に開催いたしました会議におきまして、今年度総合教育会議で取り扱う 3 つのテーマを決定し、昨年度までさせていただいた大綱に基づく詳細な事業の取組みについては、ご報告はしないというところで、ご了解もいただいていたところでございます。

総合教育会議では扱わないものの、大綱の進捗管理は別途しっかりやっていってください、というご指摘も別途頂戴しておりました。お手元の資料 P11 以下に教育大綱に基づき

ますこれまでの取組状況と来年度どうしていこうか、という取組予定を記載させていただいております。また、新たな取組としまして、事業の進捗を見るにあたっては何らかの指標がないとまずいんじゃないのか、というご指摘があったことから、本市の総合計画ですとか、また、まち・ひと・しごと創生総合戦略、奈良県の教育振興大綱などから該当する指標を引用させていただいて、あくまでも参考指標ということで、掲載をさせていただいております。

現時点で何かご意見とかお気づきになったことございましたら、お聞かせいただければと思いますし、また本会議のあとでございましたら、お気づきの点がございましたら、総合政策課もしくは教育委員会にお寄せいただきたいと思います。以上よろしく願いいたします。

<並河市長>

いかがでしょうか。項目が多いので、もしこの場で何か聞きたいこと等あればよろしく願います。

<西畑委員>

P18の「学び」の環境整備というところで、来年度から小学校にアイパッドが導入されるということになっています。本格的にアイパッドを用いた授業が始まってくるかなあ、と期待しています。ただ先生方の間で活用の温度差というのがどうしても出てきてしまいます。そういった中で、淡路市などの例を見ると、リーダーとなる先生方を置いて、そこで研修会をしてもらおうとかされていて、そこからもう7年くらい経ってはると思いますが、試行錯誤しながらずっとブラッシュアップされているというお話も聞いています。だから、いろんなものを整備していかんなあかん、先生方の研修の機会も増えるでしょうし、また研修していただく人も必要となってくるかなと思います。これだけで済む話ではなくて、費用のかかることもあると思うので、もっと具体的な部分についてきちんと考えていく必要があるというのが気になっているところです。

<森継教育長>

淡路市には綿谷係長が視察に行ってくれました。また、プログラミング学習というもので、奈良女子大学の先生に来ていただいて、3月に研修をします。

<綿谷まなび推進課指導主事>

淡路市は、今からまさに進めていくにあたって模範というか、見本になりますので、先にリーダーを作って学校に広めていくとか、各先生方の実践を集めて、誰でも見られるようにするとか、そういったことはぜひやっていきたいなと考えています。

<並河市長>

タブレットの授業だったりの中で非常にうまく使っている部分もあったんでしょうか。

<綿谷まなび推進課指導主事>

授業の中での使い方については、まだまだ研究の余地があるんですけども、全員に普及させてとりあえず全員が使えるようにするあたりまでは、すでにできております。

<並河市長>

今どうですか、本市の状況は。

<綿谷まなび推進課指導主事>

まだまだこれからです。

<並河市長>

非常によく使われている先生とその他の先生、みたいな感じになってしまっているのではないのでしょうか。

<綿谷まなび推進課指導主事>

みんなが難しく考えすぎている部分があるので、もっと簡単にできるよ、っていうことを学校側が時間をかけられない部分を市教委でかみ砕いて伝えていけたらと思います。

<並河市長>

やたら高度なことをしないといけない、食わず嫌いみたいに思ってしまったということはないのでしょうか。

<綿谷まなび推進課指導主事>

やはり抵抗感というのはあると思います。機械を使うこと自体難しい、という印象があります。しかし、そんなことないということを示していきたいと思います。

<森継教育長>

先生も子どもと一緒に学んでもらったらいいと思います。いろんな操作でも、先に気づいた子どもに教えてもらうなどしたらいいのではないのでしょうか。

ワードもエクセルもパワーポイントもキーボードすらないものを、子どもたちが自由な発想で使っていて先生方が追従するというかたちでもいいと思っています。ただ授業中は先生が中心となって、指導していつてもらったらいいと思います。

<並河市長>

できれば、それぞれ頑張ろうということではなくて、これについては組織的にやるというかたちで、普及・促進していくんだ、というところを淡路市などを例にとってもう少し深めていこう、ということでもよろしいでしょうか。

ほかの項目についてはいかがでしょうか。

よろしいでしょうか。それではまたお気づきの点がありましたら、おっしゃっていただけたらな、と思います。

私自身は、P15の「活用に関する問題（B問題）の正答率が3割以下の児童生徒の割合」、その上に「知識に関する問題（A問題）の正答率が8割以上の児童生徒の割合」、これはできる子どもたちはどんどん頑張っていってもらったらいいと思うんですけども、この3割以下の子どもたちをどのくらい底上げできるのか、ということであるとか、また、その下に「授業時間以外に全く勉強しないと回答する児童生徒の割合」がありまして、中学について若干上がってしまっているのかなあ、というところもあるんですけども、そういうあたりをうまく共有できたらと思います。

では、本日の議題は以上でございますが、何かこの機会でありますので、委員の皆さんからございますでしょうか。

<名倉委員>

学校訪問に行ったときに気になっていたことがあって、ある学校で休み時間とかに先生が全然職員室に帰って来ないんですね。フルに生徒と関わっている、それだけ見守りたい、という気持ちもおありだと思いますが、やはり先生にとっても休憩は必要ですし、それで人的数が足りているのかな、という思いを抱いた学校が何校かありました。お金のかかる厳しいことだと思いますが、やはり現場に耳を傾けていただいて、必要に応じてスクールサポートなどの対応をしていただければと思います。

<高山まなび推進課長>

よく教育長が中学校に来られたときも「高校に比べたらやはり職員室に先生が少ない」とおっしゃっています。中学校であれば、小学校はもっと足りていないのかなあとと思います。今年、スクールサポーターを少しですが増員してもらえるので、それに対応していきたいと思います。

<田中委員>

教育にはお金がかかりますので、一つよろしく。

<並河市長>

他はなにか皆さま方からございますか。

私から 1 点。子どもの安全確保の関係で、現在虐待などがあつた際に、市全体としてどれだけ対応できているのか、ということが非常に厳しく問われる状況があります。そのような中で、教育委員会や児童福祉課、県児童相談所といった現場の判断だけではなく、どれだけ教育長や私のところに状況が共有されているのかというのが非常に大事だと思っております。どういう情報をどういう形でしかるべき関係者間で共有しないといけないのか、今一度きちんと整理をしたいと思っております。この場においてもあらためて申し上げておきたいと思ひます。

それでは以上で終わりたいと思ひます。

<事務局 上田総合政策課長>

長時間にわたりご議論いただきありがとうございました。先ほどスケジュールのところでも申し上げたとおりですが、来年度は大綱の策定等ありまして、会議を 3 回ほど予定しております。本日は校長先生からもものすごくいい話を聞かせていただいたと思っております。また来年度も有意義な会議にしていきたいな、と思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

本日はありがとうございました。